

日戦争で破壊された道路の補修や住宅の改修工事等の使役に出っていました。

昭和二十一年四月六日、上海より乗船、同九日、佐世保に上陸、復員完結して郷里へ帰ることができました。

敗兵となった我々には出征の時とは異なり、近隣の方々の出迎えとてなく寂しいものでした。しかし家族は皆元気で、無事で帰った私を喜んで迎えてくれました。しばらく休養の後、父に代って農家を営み、今日に至っております。

今考えるに、戦争が起こす兵隊の労苦は筆舌に尽くし難いものです。戦争の無い六十二年間の平和な日本、これからも末永く平和であることを願います。

## 北支警備

秋田県 日 沼 富治郎

私は大正十二（一九二三）年七月二十五日、秋田県八森町という鉱山の町の社宅で生まれました。

父親は花岡鉱山の鉱夫として同和鉱業会社の社宅に住んでおりました。私は尋常高等小学校を卒業して父と同じ会社に就職して鉱山の鉱夫として働きました。この鉱山は銅をはじめ金や銀の鉱石等も採れるので事業は繁栄しておりました。途中から私は工務課電気係に配属されて、鉱内の配線工事等に従事して働きました。弟も学校を出て同じ会社に就職し、我々は父と三人で勤務しておりました。

昭和十八（一九四三）年、私は二十歳になったので徴兵検査を受け、甲種合格となりました。そして昭和十九年三月一日に秋田歩兵連隊に現役兵として入隊しました。

食事をはじめ寝るのも起きるのもすべてが時間で、決められている軍隊生活に馴れるまで全くとまどいました。しかし軍服を着た以上は命を国家に捧げたと同じだからいつ死んでも良いと覚悟は決めていても、あきらめられない気持ちには誰でも同じだったのではないかと思います。

三月二十二日、雪部隊に配属となり、秋田駅から貨車に乗せられて出発しました。下関港に到着したのは二十五日だったと思います。下関港から今度は貨物船の船倉に詰め込まれて同港を出航しました。行く先は全然分かりませんでした。幸いにして晴天続きで、波は穏やかで、船酔いもせず、また敵の潜水艦攻撃もなく、無事に着いた所は北支の太沽港だと教えられました。そして同港に上陸したのが四月四日でした。

後日知らされたのですが我々の任地はニューギニアでしたが、下関で、船の都合で百人ほどがこの船に乗せられ、他の船はニューギニアへ向った途中で、敵潜水艦の魚雷攻撃で全員壮烈な戦死を

とげたとのことでした。軍隊は連隊だと教えられていましたが、全くだと思いました。下関で、その船に乗せられていたら、今の私はおりませんでした。太沽港から太原に行き、やつと兵舎に入りました。

翌日から初年兵教育が始まりました。部隊名は雪部隊です。初年兵教育を受けながら中国軍や共産八路軍の攻撃や侵入を食い止めるための警備が主な任務でした。戦闘経験のない初年兵の私たちは、敵の攻撃の無いことを祈りながら、教育を受けたり、古参兵と共に警備の任務に勤務しておりました。

上等兵に進級した昭和二十年八月十五日、全員集合させられて部隊長から終戦の訓示がありました。敗戦と聞かされて、口惜しさより正直ほっとしました。これで明日にでも生きて故郷へ帰れると思うと、父母の顔が思い出されて、懐かしさが込み上げて来ました。

ところが四、五日したら伝染病のマラリアが発

生して患者が多く出ました。九月に入って中国軍が進駐して来ました。武装解除と言うことでしたので、機密書類や軍隊手帳等を焼いたり、三八式歩兵銃の菊の御紋章をヤスリで潰したりしてから武装解除となりました。そして部隊は中国軍の指導下に入りました。中国軍指揮の警備隊と言われましたが、武器のない丸腰の見張り隊のようなものでした。

昭和二十一年五月に集合させられて全員上海に移動して、上海港から貨物船で出航し、五月二十日に無事下関港に上陸して復員となりました。

二年振りに生きて日本へ帰ることが出来て万感の思いでした。終戦になってすぐ帰ると思ったのに、九カ月も経つての帰国でした。下関駅から汽車に乗って故郷の秋田駅へ向ったのですが、途中の駅では窓から出入するほどの混雑で、乗客の服装など見られたものではありませんでした。夢にまで見た両親の元へ帰って来て気が緩んだ故か、間もなくして現地では感染しなかったマラリアが

発病し、突然寒気がして体がガクガクふるえて、急に四〇度を越す高熱となり、何度ももう駄目かと思いました。死ぬのではないかと言う恐怖感に襲われて生きた気がしませんでした。一週間もするとけろりと治ったり、の繰り返しでした。幸いに三カ月ほどで元の健康を取り戻し、元の職場である鉱山に復職して懸命に働きました。

二十四歳の春、現在の妻と結婚し長男と長女、次女と三人の子供にも恵まれて張り切って働いておりましたが、たしか昭和二十八年か二十九年ごろ、花岡鉱山が閉山となり、社宅を出なければならなくなりました。まだ父母も健在だったので、現住地に土地を買って家を建てました。敗戦で衣食住のすべてを失った日本も、全国民が鋭意復興に努力した結果、そのころはまだ配給制度は残っていました。ところが、建築資材等は不自由なく手に入れることが出来たようでした。

町へ出て一軒もなかった商店も、床屋とか菓子屋とかがポツポツ開店したようでした。鉱山が閉

山となつてから、私は無職となりましたが、父親と二人分の退職金や失業保険の給付や多少の預貯金で細々ながらも生活に事欠くこともなく過ごしてきました。子供たちも長男は独立して家庭を持ち、次女も近くに嫁いで、代わる代わる孫を連れて里帰りしてくれますので、老妻と二人で毎日楽しく老後を生きております。これも敗戦後六十年以上の平和の賜と思っております。

平和は金で買えない、本当に有り難いものです。あのいまわしい戦争の悲惨な思いは、子や孫には絶対させたくない、させてはならない。私たち戦争体験者も年ごとにこの世を去りますが、肉親や友人、知人等多くの方々を戦争で失った辛さを、声を大にして語り継いで、世界中が平和に暮らせる社会を実現してもらいたいと念願して、日夜神仏に祈っております。

## 安慶警備、嵐部隊

福井県 吉田弘一

私は大正十一（一九二二）年、福井県鯖江市で、旅館業をしている両親の長男として生れました。家族は姉と弟と両親の五人家族でした。私は義務教育を終了して福井市立福井商業学校へ進学しました。当時は昭和初期で昭和元祿などと言われ、都市部だけが好景気だったようです。

昭和十一（一九三六）年だったと思いますが、二月二十六日、いわゆる二二六事件で、陸軍の若手将校による大臣の殺害や朝日新聞社や警視庁が占領されたりした大事件が起き、外国のラジオ等は日本のクーデター等と報道して東京は大変な騒ぎとなりました。満州事変から国民の知らないところで軍部の台頭が日増しに強くなり、ついに昭和十六年十二月八日には米英に対して宣戦布告をして日米戦争が始まりました。